
未来屋

莉雨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来屋

【Nコード】

N9139D

【作者名】

莉雨

【あらすじ】

・ 獏が経営する未来屋。そこでは、人間が望む未来をくれると言う。そこで働く一匹の黒猫が、一人の少女の少女と接して感じた事は・

『獾』・・・体は熊、鼻は象、目は犀、尾は牛、脚は虎にそれぞれ似て、夢を食べる生物。

もちろん、そんなのは架空の生物に過ぎない。

本当の獾は、人間となんら変わりのない姿をしているし、食べるのは睡眠中に見る夢ではなく、将来こう在りたいと言う夢。

その夢の為の努力とか、気力とか、そんなものがたまらなく美味しいらしい。

僕の御主人様は獾だ。
マスター

* 未来屋 *

裏通りの薄暗い町並みの中に、その店はある。

『未来屋』。そんな看板を掲げた、一風変わった小さなお店。其処が僕の住処であり、御主人様マスターの店である。

「さて、ティータイムはお仕舞いです。そろそろお客様がお見えになりますよ」

それは、ある日の長閑なティータイム。

僕が御主人様マスターの膝の上でのんびりお休み中のそんな一言だった。

まあ、よく在る事では在るのだが。

重い腰を上げて店のドアに向かった。

「いらっしやいませ」

ドアが開けられお客様が入ってくる。

お客様をお出迎えすること。

それが僕の仕事だった。

「あれ、ここは・・・？」

さて、今日のお客様は17、8才の女の子。

「お店？あれ、私なんでここに・・・。鏡がいっぱい・・・。」

彼女は店内を見渡し、不思議そうな素振を見せた。

彼女の言うとおり、この店に並んでいるのは沢山の鏡たちだ。

昔の西洋のアンティーク系の物もあれば、最近のコンパクトミラーまで、様々なものがある。

「いらっしやいませ」

「貴方がこのお店のオーナーさん？」

「いや、僕はただの・・・。」

「クス、可愛いオーナーさんね」

どうやら、いや、やはりと言っべきだ。

僕の言葉は彼女には伝わっていない。御主人様^{マスター}には伝わるので不由に思った事はないが、僕の言葉は人間には伝わらないらしい。

しかし、僕は彼女に気に入って貰えたのか、僕の頭を撫でてくれた。

「未来屋へようこそ。私がここのオーナーです」

そんな時、奥から、御主人様^{マスター}が出てくる。

「あ、やっぱりこの黒猫さんがオーナーってわけではないんですね」

彼女は僕の頭から手を離し立ち上がり、僕は御主人様^{マスター}の元へと駆け寄った。

「あの、ここって何のお店ですか？」

「未来屋、ですよ」

僕の言葉はお客様に通じないので、ここは御主人様^{マスター}に任せ、僕は静かに会話を聞くに限る。

「未来屋？」

「ええ。鏡をご覧になってください」

そう言われ、彼女は近くの鏡を覗き込んだ。

普通の鏡ならば、そのままの今の彼女の姿を映す。

しかし、其処に映った彼女はナース服を着て笑っていた。

それは、10年後の未来の彼女。

「・・・！？これ、鏡・・・ですよね？」

「それは貴女の未来の一つです。ほら、ほかの鏡にはまた別の未来の貴女が映っていますよ」

マスター
御主人様の言う通り、周りの鏡に映っている姿は教師として働いているもの、ウエディングドレスを着ているもの、歌手として歌を歌っているもの等等・・・様々だった。

「これは・・・何？」

「ここにある鏡は全て、見た人の未来を映します。
貴女はその映った姿を見て、自分がなりたいと思う姿が映っている鏡をお持ち帰り下さい。」

そうすれば、その鏡が貴女をその未来に導いてくれるでしょう」

「つまり・・・それが未来屋ってことですか？」

「ええ」

彼女は比較的頭の回転が良いほうみたいだ。

たまに、御主人様の説明を聞いてもまだ理解できない人もいるから。
マスター

「さあ、好きな鏡をお選び下さい」

「あの、本当にその鏡があれば、その未来になるんですか？」

「もちろん。」

貴女は努力も何もしなくても、訪れるのはその未来だけです」

理解した、ようではあるが、やはりまだ半信半疑の様子。

鏡を不思議そうに眺めているだけで、選んでいる様子はない。

「この鏡、何円いくらですか？」

あの、ごめんなさい、私あまりお金持って無くて・・・」

突然、少し照れくさそうに彼女はこう言った。

持ち合わせが少ないのを気にして選んでなかったのだろうか・・・？

「お金はいりません。

ここで鏡を持って帰ったとして、貴女が何かを失うような事はありませんよ。

あえて言うなら・・・これから貴女がする余計な事、は無くなりますが。

それは貴女にとって損ではないでしょう？」

御主人様マスターにそう言われても、彼女は考えるような様子をし、選び始めない。

早く選べば良いのに。

彼女は思い通りの未来になり、御主人様マスターはおなかいっぱいになれる。

今までのお客様は、御主人様マスターにそう言われると、喜んで鏡を選んでいた。

これは人間にとっても、獺にとっても特になる、取引。

きっと、彼女も今に鏡を選び始める。

そう思った。

のに。

「あの・・・」

「どうしました？」

「やっぱり、鏡を貰わずに帰るって言うのは駄目ですか？」

なんて事言い出すんだろ。初めて聞いたその言葉に、驚きを隠せない。

「何故です？貴女にとってもいい話、だと思いますけど」

「でも、私、夢は自分で、自分の力で掴みたいんです。

それに、これからすること全てに無駄な事なんてないと思いますから。

だから、これからする事が減っちゃうって事は、私にとって損なんです」

「損・・・ですか・・・？」

「はい。

それに・・・さっき、好きな鏡（未来）をお選び下さいって言いましたよね。

なら私は、ここで鏡をもらって帰らない未来を選びます」

マスター
御主人様も僕も、彼女の言葉に呆気にと取られた。

確かに、彼女の言う通りだ。

でも、僕の知る限り、人間って、そんな生き物でないはずだった。

楽を望み、安定した人生を目指して生きている。

そんな生き物が、人間のはず。

だから、今までのお客様は喜んで鏡（未来）を持ち帰ったんだ。

「・・・」

「あ、やっぱり駄目ですか？

お店の中に入ったのに何も買わずに出ちゃうなんて失礼ですよね？」

彼女が、本気でそんな事を悩んでいるものだから、僕も御主人様も、
笑ってしまった。
マスター

もちろん、声を堪えて、だけど。

こんな人間がいるんだと、感心した。

「いえ、結構ですよ。頑張って貴女が掴みたい未来を、自分の力で掴んで下さい」

「ありがとうございます！」

そして、彼女は帰っていった。

結局食事は手に入らず、また二人きりのティータイムが訪れた。

僕は指定席の御主人様マスターの膝の上に座り込む。

「御主人様マスター」

「何だい？」

「あんな人間、いるんですね」

自分の力で進もうとする、そんな彼女を見て初めて、人間というものに興味を持った。

すると御主人様マスターは

「ああ。昔は結構あ言う人間もよくいたんだけどね」

最近は滅多に減ってしまった。

そう言って、笑った。

「私はそんな人間のほうが好きだよ」

「^{マスター}御主人様、でもそれでは食事が・・・！」

そんな事を言い出すから、僕は慌ててしまった。

確かに彼女のような人間は素敵だと思ってしまったけど。

「^{マスター}御主人様が食事が出来なくなってしまうのは困る。」

「わかっているよ。ほら、また次のお客様が来たよ。彼から、食事はいただくでしょう」

「はい、^{マスター}御主人様」

人間と会話が出来ればいいな。

そんな事を考えた、ある昼下がりのこと。

「いらっしゃいませ」

ここは獺が経営する未来屋。

未来を手にし、努力をする事を忘れる人間になるか

自分の未来は自分で手にいれようと日々努力を繰り返すか

「さあ、好きな鏡（未来）をお選び下さい」

- - F i n - -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9139d/>

未来屋

2011年1月20日04時27分発行